

ダイバーシティが拓く未来

土 橋 恵美子

奨励者紹介〔つちはし・えみこ〕

同志社大学学生支援センター

スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室チーフコーディネーター

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で

決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通して自分たちの国へ帰って行った。

（マタイによる福音書 2章1―12 節）

成人を迎えた障がい学生支援

本日は、このような場でお話しさせていただく機会をくださりありがとうございます。只今ご紹介いただきました、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室の土橋です。

同志社大学は、2000年5月に障がい学生支援制度を発足し、昨年（2020年）20周年を迎えました。支援制度では、本学に在籍する障がいのある学生が他の学生と等しい条件のもとで学生生活を送れるように、修学環境を整えてきました。また、支援を受ける学生と彼ら／彼女らを支援するサポートスタッフがともに支え合う中で自律的な成長ができるよう、障がい体験を取り入れた講座やキャンプを行うなど、さまざまな取り組みを重ねてきました。

只今お配りしたチラシにあるとおり、今出川キャンパスのハリス理化学館同志社ギャラリーで20周年

記念の企画展示会を開催していますので、20 年の変遷をぜひご覧ください。

障がい学生支援室は 20 歳を迎え、今年2021年4月、スチューデントダイバーシティ・アクセシビリティ支援室に改組しました。ダイバーシティにあふれるキャンパスを視野に入れる必要性が出てきたことによる組織改編です。ここで申しあげるダイバーシティキャンパスの視点というのは、障がいの有無に限らず、人種、経済的地位、社会階級、民族、言語、宗教、性別、性的嗜好および能力といった「多様性（ダイバーシティ）」を尊重した互いのかかわり方を指しています。

障がい学生支援制度が発足した2000年当時を振り返ると、障がいの有無に限らないダイバーシティを尊重した時代が来るなど想像もしていませんでした。20 年前と言いますと、まだ大学には「障がい学生支援コーディネーター」という言葉はなく、日本の大学のほとんどが障がい学生の把握さえできていませんでした。

コーディネーターである私は、障がい学生の「私は、ただ他の学生と同じように勉強したいだけです」という訴えを代弁する形で、各学部や先生方へ配慮のお願いをしてきました。

それが、2016年に施行された障害者差別解消法によって、障がいは「個人の心身機能にあるのではなく、社会と個人の間にある」と捉える考えが生まれました。

そして、コーディネーターの役割は、障がい学生の学ぶ権利を本人に成り代わって代弁する代弁者から、法によって守られることになった障がい学生の学ぶ権利を仲介的な立場でつなぐ仲介者へ転換することになりました。つまり、法律ができたことによって「組織のコンプライアンスとして学生と大学をつなげる」という役割を担うことになったのです。

障がいのある学生は、自身の自助努力のみによって克服するのではなく、多数派のために整備された社会側にある障壁を除去（または削減）するために、支援の必要性を自ら表明し、建設的対話を通して配慮を検討することが求められました。

法の施行から5年を迎え、当該学生が要請する支援のあり方にも多様性がでてきました。

そこで本日は、視覚障がいの中で、全く見えないという全盲の世界をご紹介します。知ることから得るダイバーシティの重要性が私たちの心や考えを拓くトリガーとなり、キャンパス全体が人ひとりを大切にするマインドであふれる未来を期待しています。

全盲学生の学びと全盲の世界

最初に、新型コロナウイルス感染症による影響について触れておきます。

2020年度春学期は、すべての授業がネット配信となり、入構も制限されたことにより、授業だけでなく、学生とのかかわり方も遠隔という形に急変しました。そうした中で、私たちを根底で支えてくれたのは、障がい学生の「同志社大学で学びたい」という強い思いと、支援室で脈々と受け継がれてきた「同志社大学を選んでくれたあなたを忘れてはいけない」というマインド、そして「障がい学生の思いに応えたい」という教職員や支援スタッフの思いでした。

一例を紹介いたしますと、視覚教材を中心に進む授業において、全盲学生の受講は難しいと決めつけていた科目がありました。なぜなら目の見える晴眼者も直接見たことがない地球の動きや地中の変化を視覚教材から学ぶ授業だったからです。それが対面ではなくネット配信で行われるのですから、概念とし

て理解できても、視覚的に理解する学生と等しい学びは難しいだろうことを当該学生に説明したところ、「それは想定内です。そのうえでこの科目を学びたいので、履修中止の予定はありません」と即答されました。私は最初から無理ではと決めつけて、当該学生の可能性を閉ざしてしまうところでした。

科目担当の先生は、全盲学生のために、地表や地球の状態や動きが分かる海洋底の模型や大陸パズルを手作りしてくださり、試行錯誤の結果、模型やパズルの文字の部分は、支援室で点字シールを作成して貼ることにしました。模型やパズルの形に合わせて、海洋底の動く方向や大陸名などを点字で示し、凡例を添えました。

約3万人在籍する学生の多様性と、コロナ禍によって生まれた支援の可能性がミックスされた一例で、コーディネーターとして配慮提案をするための本質的な引き出しを増やすことができました。

前置きが長くなりましたが、全盲の世界をご紹介します。

目の不自由な方の中には、全く見えない、見えにくい、周囲や真ん中が見えにくい、明るいと眩しい、色見え方が通常と異なるなど、いろいろな見えにくさのある方がいます。小さい時から見えにくい方もいますし、大人になってから事故や病気で急に見えなくなった（見えにくくなった）方もいます。

明かりがなく、視力が全くない状態を全盲と言いますが、生まれた頃から視力のない先天性と何らかの理由で失明した後天性の方がおられ、失明した時期によってそれまでに得た知覚の知識量で視覚的情報が違ってきます。

人間は、五感からいろいろな情報を得て日常生活を送っていますが、中でも80～90%を視覚に頼っていると言われています。その感覚を失っている方は、どのように情報を得て、何を手がかりに状況や状態を把握し、生活を送られているのでしょうか。ある全盲の方は、視覚以外の感覚を使って、人の話し声だけでなく、街の環境音、匂いや風の流れをもとに歩行し移動しているとおっしゃっていました。建物と建物の間を通る時に、ふわっと風を感じるそうです。

点字ブロックと音響式信号機

ここで、視覚障がい者を安全に誘導する設備として、点字ブロックと音響式信号機についてお話ししたいと思います。

点字ブロックとは、路面に敷設された黄色い凸凹のブロックです。学内にも敷設されていますが、点字ブロックには、線状の誘導ブロックと点状の警告ブロックがあります。誘導ブロックは進行方向を示し、線方向に道があることを知らせています。一方、警告ブロックは、文字通り注意を促し、いったん止まる場所を示しています。キャンパスの中で見る多くの点字ブロックは警告ブロックで、階段前やエレベーター前に敷設されており、「いったん止まって」と警告しています。

次に信号機についてですが、両校地キャンパス前は音響式信号機となっています。音響信号は「通りゃんせ」などのメロディーを聞いた方がいらっしゃるかもしれませんが、現在は「カッコー・カッコー（カカッコー）」「ピョ・ピョピョ」の導入が進んでおり、両キャンパス前の信号機もカッコーとヒヨコの鳴き声ですね。なぜ2種類の鳴き声が使われているかというと、視覚障がい者が音によって縦断するか横断するか、自分が渡る方向を判断できるようにするためだそうです。

そして、音の組み合わせには2つのパターンがあり、一つは交差点で交通量の多い道路（主道路）を渡

る時には「カッコー・カッコー」と鳴り、交通量の少ない道路（従道路）を通る時に「ピョピョ」と鳴るパターン、もう一つは東西や南北で使い分けられているパターンがあります。横断歩道を渡る時、鳴き声を聞くと、進行方向の前後の信号機からそれぞれ交互に「カッコー・カッコー」と鳴ることに気づくと思います。視覚障がい者は、交互に鳴ることで、確実に自分が横断歩道の上を歩いていることを確認でき、進んだ距離を判断する目安にしています。

横断歩道をまっすぐ渡るためには、横断歩道の幅に対して中央部分にスピーカーを設置する必要がありますが、向きがズレていると横断歩道からそれ、渡り切った時に歩道の段差に引っかかったりガードレールにぶつかったりすることもあるようです。そうした時に、横断歩道の中央部分に敷かれた点字ブロック（エスコートゾーン）があれば、最も危険である道路を安心して横断できることになります。全盲学生の入学後、烏丸今出川の交差点には関係者の働きによってエスコートゾーンが敷設されました。点字ブロックやエスコートゾーンを利用される方が多い地域では、利用者同士でぶつかることもあったと聞きました。また、音響式信号機は、周辺住民への配慮から、夜間は音が鳴らないよう止められ、交差点に設置されているボタンを押すとその時だけ音が鳴るようになっているようです。

以上のように整備された地域であっても、初めて歩く道は動線や危険箇所が分からないため、日常的に利用する施設は歩行訓練士の方と一緒に歩き、何を頼りにして進むと安全に目的地へ到着するか、危険なポイントはどこか、といった情報を収集したうえで日々の生活を送られています。

本学に入学した全盲学生も、身内の方や歩行訓練士の方と一緒に自宅から大学まで、続いて大学の門から各校舎へ移動する訓練をした後、使用する校舎の教室配置やエレベーター、階段、お手洗いの位置を確認し、数日間かけて安全で快適な動線を確保したうえで大学生活を送っています。

移動において、高校までとの大きな違いは、自分の登録した授業教室へ向かわなければならない、一つの校舎で1日が完結しないことです。そのため授業が始まった後、教室変更やキャンパス変更があると、私たちコーディネーターも一緒に動線の組み直しをしながら環境調整をしています。

大学のキャンパス内ではほとんど車両が走らないため、大きな危険はありませんが、キャンパス内の環境がいつも同じとは限らず、頻繁に変化するため、小さな危険箇所がたくさんあります。たとえば、昨日なかった立て看板が突然立てられ、ぶつかることなどです。

2020年からは、コロナ禍によって、消毒液が廊下や各建物の入口に設置され、席の数や向きが変わり、アクリル板や飛沫防止シートが設置されました。視覚障がいのある方にとっては、「入口正面に障害物」という、これまで想定しなかったパターンの障壁が増えました。また、窓口にアクリル板が設置されていることを知らないかもしれません。

点字と色

移動について話してきましたが、使用している文字や知覚についても触れておきたいと思います。

点字はあまり身近なものではないかもしれませんが、見たことはあると思います。皆さんの一番記憶に新しいところでは、どこで見られましたか。エレベーターの操作ボタンのところでしょうか。

大学では、階段の手すりや校舎毎に点字案内があります。

しかしながら、おそらくもう少し身近なところで目にしているのでは、と思います。たとえば、自宅のトイレ

のウォシュレット、洗濯機などに点字表記があります。20歳を超えている方は、缶ビールや缶酎ハイの蓋に点字表記されていることに気づかれたかもしれません。蓋には「オサケ」と書かれています。

この点字は1文字6点からできており、指の腹で読むのにちょうど良い大きさとなっています。点字は音から成り立っているため、「わたしは」は、点字で「わたしわ」と表示され、「だいがくへ」は「だいがくえ」となります。「う」は「一」とのばすルールになっていますので、「わたしはどうししゃだいがくへかよっています」の点字表記は「わたしわどーししゃだいがくえかよっています」となります。また、点字には漢字がないため、メールやレポートで表記の間違いが見られることがありますが、当然のこととも言えるわけです。

また凹凸のサインとしては、シャンプーの蓋やガスコンロ、空気清浄機、電子レンジ、ストーブの電源ボタンや各種リモコンのスイッチボタンに凸のサインがついています。もっと身近な1000円札、5000円札、1万円札にはそれぞれ筋が1、2、3本入っており、全盲の方は区別がつかます。そして1000円、5000円、1万円札を3枚重ねるとそれぞれ5ミリ程度長さが異なっていることも分かるでしょう。

さて、目の見えない人は、色をどのように捉えているのでしょうか。

見えていた時期のことをあまり覚えていない全盲学生は、色を概念的に理解していました。たとえば、赤は、りんご・苺・太陽・血・熱などを指し、青は、空・海・夏・涼しさなどを指していました。

しかし、りんごは赤い、バナナは黄色いという概念はあっても、実際に食べている部分（皮を剥いたりりんご、皮を剥いたバナナ）が白っぽい色をしているという概念はないかもしれませんし、そうした食べる部分の色より、酸化したリンゴや熟したバナナの色が変化する概念の方が重要かもしれません。

さらには、概念づけられた色が、本来の色とは異なってくることもあります。たとえば、青虫や青信号は、実際の色は青ではなく緑色ですよね。

全盲の世界へ

全盲の方が視覚以外から受け取っている情報などについてお話をしてきましたが、最後に全盲の方の状況を皆さんと一緒にイメージしたいと思います。

今からしばらくの間、目を閉じてお聞きください。

今日、皆さんがお召しになっている上着、ズボン／スカート、靴下は、おそらく今日の天気や行先を考え、また色のバランスも考えてコーディネートなさったと思います。では、目を閉じている今のように、見えない状態だったらどうでしょう。

想像してみてください。

布団から起きて、タンスから今と同じ上下の服、靴下を選べたでしょうか。見えない状態でも「できた」という方は大きく頷いてください。

続けて尋ねます。

携帯のパスワードを解除して時間と充電の確認ができたでしょうか。

冷蔵庫を開けて一番消費期限の早いヨーグルトを取れたでしょうか。

では目を開けてください。ありがとうございます。多くの方が首を横に振っておられました。こうしてみなさんは目を開けて、再び見ることができますが、全盲の方はこの後も続きます。

・自分の歯ブラシはこれ

- ・今日の教科書と資料はこれ
- ・一番大事な白杖を持って
- ・もう片方の手もあけておきたいので、今日もこのリュック
- ・玄関を出て7歩あるいたら階段
- ・壁に沿って歩いて電柱2本目にぶつかったら右折

そうした毎日を送っています。

もしかしたら、目のかわりにスマートフォンを利用して、このような確認をしているかもしれません。

- ・Hey Siri、今 何時?→回答
- ・Hey Siri、傘はいる?→回答
- ・Hey Sir、今日は雨降る?→回答

これを聞いて、傘の準備をするかしないかを決めます。

そして周りに人の気配もなく、道に迷った時に

- ・Hey Siri、一番近い交番はどこ?→回答
- ・そこへ行きたいです→回答

本日、全盲の世界から初めて知ったことはありましたでしょうか。その気づきこそが、ダイバーシティな人との出会いがもたらす恩恵なのです。

障がい学生を受け入れることで、同志社大学が成熟するための多くの気づきをもたらしてくれています。今年の4月に新しく入学してきた障がい学生を目の前にして、さあこの学生が本学にどんな気づきをもたらしてくれるか、どんなイノベーションを起こしてくれるかという期待をもって受け入れることこそがダイバーシティなのです。

知ることから得たダイバーシティの重要性が私たちの心や考えを拓くトリガーとなり、明日からのキャンパスが人ひとりを大切にするマインドであふれていく未来を期待しています。

2021年5月12日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録